

大学生の力を活用した集落復興支援事業

2016年度 福援ゼミ 活動報告書

東北学院大学教養学部地域構想学科 高野ゼミ

◇はじめに：2016年度の課題

◇調査報告

- I. 多様な食資源とその担い手
- II. 里山資源を活用したお手玉づくりの可能性
- III. 手漉き和紙の継承と発展
- IV. 羽山山車祭り維持の工夫
- V. 小学校と地域

◇提言：危機を逆手に — 里山生活博物館 Living Museum



◇はじめに：2016年度の課題

1年目の活動

福島県北端の山村・山舟生は、阿武隈山地の低山帯に位置し、商店、飲食店、旅館、特段の観光スポットもない、そして人口減少と少子高齢化が進む、現代の「普通」のありふれたようなたたずまいで私たちを迎えてくれた。しかし、立ち上がったばかりの「自治振興会」事務局メンバーをはじめとする地域各層の人々による「おもてなし」と現地案内・ヒアリングを通して、この阿武隈阿の「普通」の村にも、多彩な「宝」が内包されていることを知った。その内容は、本事業1年目の報告書において、①「自然環境・景観」、②「イベント・人為景観」、③「伝統文化・行事」、④「食資源」、そして⑤「人・組織」の5点に整理して示した。

これらはいずれも、「里山」の村の伝統の暮らしと環境利用を体験するための学習・交流の「資源」になりえると感じたことから、その拠点づくりが課題であるように思われた。しかし、山舟生にはそうした交流活動の拠点となる宿泊施設がなく、2015年9月に実施した2泊3日にわたる視察とヒアリングに際しても、宿泊は隣町の公共施設にとらざるを得なかった。そうしたことから、初年度の提言として、里山の生活文化をまるごと体験できる交流・宿泊施設「里山 Living Museum（生活博物館）」のアイデアを提示した。

これらの「宝」と「Living Museum」構想は、初年度末の2016年3月に開かれた現地報告会において報告し、若干の意見交換を行った。その席上で、地元唯一の小学校が2016年度限りで統廃合になることが決まり、その空き施設の利用が近々の地域づくりの課題になるので一緒に考えてほしいとの意見が出された。

2年目の"実証"活動

以上の流れを踏まえ、2年目の活動をスタートさせるにあたって、1年目に出会った「宝」は、それらの成立経緯や担い手の想いなど「出会った」ばかりで不明な点がまだまだ多いこと、「宝」に関する経緯のほとんどは地元の人々の「記憶」にのみ残り「記録」されていないこと、そうした状態での「実証実験」はできにくいし、さらにヒアリングを進めて「記録」を残すことが、後の「宝」の「資源化」と、それを生かした「Living Museum」づくりにも必要であるとの結論に達した。そしてこれは、別の意味での"実証"研究といえるのではないかと考えた。

以上の議論をふまえて、2年目の2016年度は、1年目の7人のメンバーのうち5人が継続して参加し、初年度に見出された「宝」のうちから、「食資源とその担い手」、「里山資源を生かしたお手玉づくり」、「手漉き和紙の継承」、「伝統行事羽山山車祭りの維持」、そして統廃合という厳しい事態に直面して「山舟生小学校が地域に果たしてきた役割」を加えた5つについて、それらにかかわってきた人々の歴史、工夫、想いについて掘り下げ、地域の文化的・社会的遺産として「記録」に残すことを課題として設定することにした。

以下、本年度の報告では、まず5つの調査テーマに関して明らかになった要点を紹介した後、それらを地域づくりの「宝」＝「資源」として、遊休施設となる山舟生小学校に集約した「里山 Living Museum（生活博物館）」の構想として改めて提言したい。

◇実証調査—地域の文化・社会的遺産の記録

I. 多様な食資源とその担い手

最初の山舟生訪問以来、ゼミメンバーは多彩な「食」のおもてなしを受けた（内容は1年目の報告書で提示）。それらを、個人的か組織的か、無償か有償かという観点で整理すると下図のようになる。



また、素材、担い手、機能（用いられ方）という観点で整理すると右表のようになる。

山舟生の人口 835 人（2015 年 7 月）で山間地に分散し、コンビニも飲食店も人通りもない静かな村であるが、集まりの度に手際よい人々の技から生まれる「食」の数々は、今後の交流の地域づくりにとって最大の資源である。

課題は「担い手」である。羽山漬、春菊もち、そば同好会などの組織的な取り組みもあるが、個人の力に依存する部分も多い。例えば、地元野山の自然素材と加工技術に豊富な経験と知識をもつ猟師の SK 氏、食生活改善を担ってきた女性リーダー AH さんらである。両人はじめ「食」の担い手の多くは高齢者であることから、彼らの知識と技能を地域の知的資産として記録に残した上で、組織的に継承する体制づくりが喫緊の課題といえる。

素材, 料理, 特徴		担い手	機能	
イノシシ, シカ, クマ, 蜂蜜, アユ	野生, 半野生 素材	個人(趣味)	販売用	懇親・交流・趣味 祝祭行事
米, 野菜, 果樹	農産物	農協女性部		
米, 野菜, 果樹	自家作物	農家, 家庭	非販売・懇親用	
野菜類	漬物	家庭		
味ご飯, おにぎり, おこわ	行事・懇親用のご飯	家庭		
もつ鍋, 豚汁, 団子汁	鍋物汁物	家庭		
ピザ	専用釜	個人(趣味)	祝祭行事	
もち	臼, 杵つき	家庭, 行事組織		
そば	手打ち	同好グループ		
あんぼ柿	果樹, 加工品	農家	商業用	経済活動
羽山漬	漬物	事業グループ		
御膳料理	農家レストラン			
春菊餅	加工品	生産営農部会	生活改善	地域行事
	家庭料理, 伝統料理	食生活改善部会		

II. 里山資源を活用した「お手玉」づくりの可能性

阿武隈の低山帯に位置する山舟生の山々は、どれも人の手で利用されてきた「里山」であり。地域づくりには、その身近な環境と資源、すなわち「生態系サービス」の利活用が欠かせない。1年目の調査で私たちが出会った里山資源には上述の「食資源」のほかにも魅力的なものが多かった。その中で、山舟生財産区の共有林の樹木を利用した「お手玉」の可能性を広げたい。



地区北端にある「和田山」は旧村時代の共有林に由来する財産区で、かつて共同桑園も開かれたが、養蚕衰退後は、自治会長だった地元 M 氏らによってエゴノキが植栽された。エゴノキは花がきれいで「花見」ができ、その乾燥種子は軽やかな音で「お手玉」に最適であることから、M 氏の仲間数名でお手玉づくりを始めて地域の小学校や高齢者サロンに寄贈してきた。M 氏らはこれを商品化したいと考えて、ゼミメンバーに相談を受けた。



「お手玉」に関する既存研究を調べたところ、伝統的遊びの民俗文化的意義や、幼児の運動能力育成、高齢者のリハビリへの利用の面からの報告が少数見出された。また、お手玉の全国団体として「日本のお手玉の会」があるがその支部は西日本が中心で東北にはないこと、エゴノキやお手玉を地域づくり資源としている例が他にみられないこと（web 検索による）、そして共有林資源の利用は「里山文化」の村ならではのものであること、という理由から、「お手玉」は山舟生のシンボルになりえると考える。

そこで、その販売先を開拓するため、県内 7 件の民芸雑貨品小売店に販売交渉を行って、商品化に必要な条件を検討した。その際ポイントになったのは、M 氏らがお手玉に「会津木綿」を用いたいとしている点であった。会津木綿はその縞柄が全国的に人気を集めており、その使用はお手玉の品質を高めるものである。反面、製造コストを高くしており、販売にあたって制作費に基づく M 氏らの希望価格に対して、小売店側からは安価な布を利用して低価格にしないと難しいとする指摘が大半を占めた。

確かに、M 氏らのお手玉は、手に取ると質の良さが体感でき、またシックな縞柄は大人には好感がアピールし得るが、鮮やかな色合いで安価な民芸品のお手玉（右写真）と比べると、小売店側も引き受けづらいと考えるのは理解できることである。



一方で、エゴノキの実は、他にも「枕」に入れると心地よく、また石鹼づくりも利用されている。お手玉は今のところ個人宅で制作されているが、専用工房を付帯した交流販売施設を設けて、地域としてエゴノキの総合的利用を推進する組織体制を整え、その中で高品質の「お手玉」を地域特産品の 1 つとして提供していくような方策が必要である。

Ⅲ. 手漉き和紙の継承と発展

山舟生には伝統の「手漉き和紙」が継承され、製品は地元の小学校で卒業証書に利用されている。しかしそれは、一時廃れた和紙を復活した時のメンバーで保存に熱心な1人の個人に委ねられているのが実態で、継承・発展の見通しは明るいとはいえない。他方、福島・宮城にまたがる阿武隈峡谷には、和紙産地の村々が分布しており、今も4か所で維持・継承されている(右図)。手漉き和紙は、楮、ミツマタ、桑など、里山の資源で成立してきた産業であり、蚕卵紙の需要を背景に明治期に120戸を数える大産地だった歴史は、山舟生が誇れるレガシーである。



そこで実証研究では、山舟生の近隣4産地の歴史と維持の体制を市町村史誌と新聞記事で整理し、さらに文献情報の少ない山舟生と丸森の2箇所については実地調査によって比較検討し、手漉き和紙の継承・発展の方策を考える。

調査の結果、4産地の特徴は下表のように整理できることがわかった。維持の主体は、振興組織を結成して町が製造展示施設を整備したの上川崎、卓越した技能者の逝去を受けて地元の街づくり団体が継承した白石、夫が紙を漉いて妻が製品を作り息子が時に支援する丸森、そして実質的に1人の有志に頼る山舟生と「4者4様」である。他方で、その製品の大半が地元の小中学校が証書用に買い上げて支援しており、これがなければ存立し得ないのが実情である。しかしそれは、和紙が地域に継承された伝統文化として、地域独自の教育的価値が認められているからである。

以上をふまえると、山舟生の和紙もまずその歴史民俗資料の展示とあわせて教育的体験ができる工房を整備し、個人の熱意を生かしながらも地域組織として継承する体制づくりが課題である。

	上川崎和紙	白石和紙	丸森手漉き和紙	山舟生和紙
型	地域型(組合型)	家族型→地域型(NPO型)	家族型	個人型兼地域型
従事主体	上川崎和紙振興組/和紙伝承館	遠藤忠雄氏/ましこさん→NPO団体「蔵富人」	宍戸さん夫妻, 息子さん	和紙づくり伝承会→和紙伝承会/八巻政行さん
伝統継承	途切れかけたものを復活	行政の介入で継承	代々継承	途切れかけたものを復活
復活の発端	住民の声			卒業証書の利用を目的として校長先生の呼びかけにて
活動内容	・卒業証書の作成 ・土産物屋への製品卸し ・地域行事での活用	卒業証書の作成 地域行事での活用	・卒業証書の作成 ・個人への販売 ・斎理屋敷で販売 ・地域行事での活用	卒業証書の作成
資金源	・和紙漉き体験, 工芸品制作体験, 土産物販売, 卒業証書の作成		・地域郷土館にての販売 ・個人への販売 ・卒業証書の作成	卒業証書の作成
行政の支援	1991年～2001年に補助金を受ける。	伝統工芸品育成事業	なし	過去に一時的な支援金あり
広報	和紙伝承館	地域行事での活用イベントでの活用	町の広報誌による掲載 メディアの取材	過去に冊子など作成した経歴あり
課題点	・安達町と二本松の合併による温度差の解消 ・後継者の育成 ・伝承館の安定した運営 ・収益の問題	・後継者の育成	・後継者問題 ・震災でなくなった販路 ・行政を介した技術の継承	・後継者問題 ・販路の充実 ・工房兼伝承会の老朽化 ・原材料の入手

IV. 羽山山車祭り維持の工夫

羽山神社とその秋の大祭「山車祭り」は山舟生の人々の「まとまり力」の原点であることは、1年目の見聞を通して実感された。漬物やそばへの名づけがその証拠である。その一方で人口減少と高齢化による近い将来の「担い手」の確保に不安を抱いている。そうした中でも2016年の祭りは滞りなく実施された（下図,上段左→下段右）。地域のハレ舞台に他出した若者たちも帰省して賑わうかと思いきや、人々の年齢構成には普段とさほどの違いは見受けられなかったことは「不安」の証左でもあった。



しかし、山車祭りの歴史を人々に聞いてみると、若者の関心が薄れた高度経済成長期には中止されていたこと、通勤の増加などの状況変化にあわせて、祭りの開催日、神輿の移動手段、山車制作の効率化や運行ルート短縮などさまざまな工夫（下表）が行われてきており、祭り自体の実施と7台の山車の制作が維持されてきた（一時中止期間を除いて）ことが判明した。

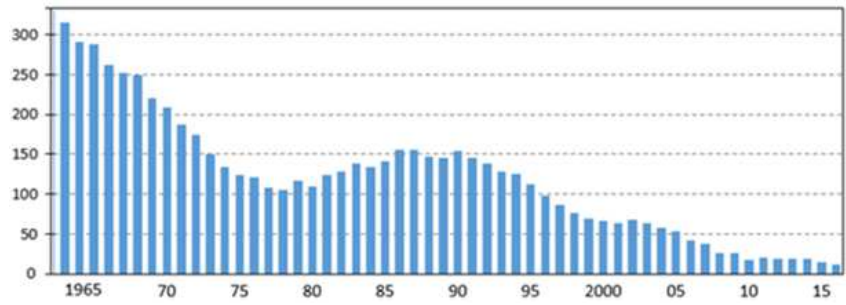
祭りの担い手問題は山村だけでなく、仙台中心部や、人口増加地域でも地付の氏子が減っている郊外集落にも同様である。仙台では学生や一般の同好サークルや他町内の神輿組織の協力で乗り切ったり、他出者が故郷の祭りに帰村して支える山里の例もある。

地域の「まとまり」の源泉である山車祭りは、様々な工夫によって維持に努めながら、将来に向けては通勤圏に住む親戚有志の力や、webやSNSを活用して同好の士を広く集めるような工夫も必要になると考える。

	「昔」	今
祭日	旧暦10月7・8日	11月の最初の土日
運営	・どの町内も青年会が祭りの運営	・青年会は名前だけになり、今は町内会で担当
山車制作	・いいちゃん、ばあちゃん、若夫婦、子ども6・7人で参加するのが普通	・今は世帯から1人出てきてくればいよいよ ・各町内会で工夫がみられる
神輿渡御	・御神馬一塩振り一猿田彦一拍子木一楽人一旗・太鼓等一神輿一宮司一楽人一賽銭箱一神社総代一世話人ほか ・1日目:宮本一加老一日面一除石一東部一小学校 ・2日目:小学校一西部一中部一南部 ・徒歩で担ぐ	・警察一宮司一天狗一太鼓一宮司一賽銭箱一総代長一世話人 ・1日目:宮本一加老一日面一東部一西部一小学校 ・2日目:小学校一残り2区 ・車で移動
山車運行	・宮本に7台の山車が揃い、神輿の後に続いて運行していた。 ・山舟生の全域、輿まで行っていた。	・宮本に山車がそろうことはなくなった。 ・山車7台の行列はとんでもない長さ。県道は交通障害の理由で許可が下りなくなった。 ・運行コースは各山車に任せられ、かなり短縮。 ・各町内から小学校に引っ張ってくるまでは歩く。その距離しか引っ張らない。

V. 小学校と地域

明治の学制以来140年の歴史をもつ山舟生小学校は2017年3月で梁川小に統合されて閉校となる。1960年前後に400を数えた児童数が2016年度は12人に減少した状況（右図）をふ



まえると、「教育効果」重視の論理に対して、地元側としても市の方針を受け入れざるをえなかった。

小学校は子供の教育機関であるだけでなく、地域の人々の交流機関としての役割も果たしており、その廃止はコミュニティの「よりどころ」を失う「危機」と捉えられてきた。実際、山舟生小学校の場合は地域の人々とどんな交流があり、小学校閉校によって何が失われ、また何が持続し得るのか。

一方で、小学校の閉校は、地域が希望している「交流拠点」への転用の可能性が開かれるチャンスでもある。その利活用に際しては、ハード施設だけでなく、小学校と地域で培ってきた交流活動のソ

フト面も大事な「遺産」として引き継ぎたい。そうした思いから、山舟小学校と地域のかかわりについて、小学校と自治振興会へのヒアリングによって整理してみた。

2016年度の山舟生小学校の行事のうち、地域の人々の参加や協力を伴うものは毎月のようにある（左表）。そのうち最大のものは9月の「地区大運動会」である。そのプログラム（下表）をみると、地区住民の各層が参加する様々なプログラムが用意されて、児童よりも主体となっていることが分かる。

4月	入学式 交通教室
5月	奉仕作業 移動教室(4日間) 防犯教室
6月	学習発表会 森林学習
7月	あじさい祭り
8月	盆踊り
9月	授業参観・教養講座 学校周辺の除草 地区大運動会
10月	見学学習 羽山太鼓の練習
11月	羽山山車祭り 収穫感謝祭(もちつき)
1月	だんごさし 卒業証書用紙漉き
2月	森林スキー学習 授業参観・PTA総会
3月	卒業証書授与式

No.	種目名	学年・団体等	No.	種目名	学年・団体等
1	ラジオ体操	全員	11	紅白対抗親子綱引き	小学生全員・保護者
2	大玉ローリングX!	小学生全員	12	班対抗リレー	消防団
3	大玉宅急便	小・中・高PTA	13	いそいでひろって	幼児
4	光より速く～かけっこ～	小学生全員	14	宝ひろい	長生会(来賓)
5	中・高・一般1周走	地区民	15	七不思議巡り	婦人団体
6	ゆっくりゆっくり安全運転	安全協会・防犯協会	16	親子三代リレー	地区民・小学生
7	一緒に走りましょう!～ドラゴンボールとともにin山舟生～	小学生全員	17	山舟生記念写真撮影&キビタンと踊ろう	小学生・地区民
8	元気はつらつ紅白玉入れ	長生会・小学生全員		昼食	
9	分館対抗玉入れ競争	地区民	18	紅白対抗全校リレー(学校)	小学生全員
10	分館対抗綱引き	地区民	19	分館対抗男女混合リレー(体協)	地区民選手

他にも、6月の学習発表会は普段から地域学習を通してお世話になっている地域の方々への感謝を伝える。7月の地域イベント「あじさい祭り」には「緑の少年団」の一員としてアジサイを植樹する。羽山秋祭りを前にした10月には「羽山太鼓」の練習が地元の人が先生役になって行われる。12月の「感謝祭」では交通安全や「読み聞かせ」などでお世話になっている方々に餅をついて感謝する。1月の「だんごさし」は地元の女性や高齢者の団体と共同で小正月の家庭行事が伝承される。また6年生は小学校の隣にある和紙伝承館で卒業証書用の紙漉きを行い、地域の伝統産業にふれる。

小学校を介したこれらの交流活動は地域のレガシーとして記憶し、可能なものは統合先の小学校の子供たちを巻き込んだ存続を検討していくことが必要である。

◇提言：危機を逆手に -- 里山生活博物館 Living Museum の実現に向けて

山舟生との交流が始まった 2015 年度は自治振興会が発足し、小学校の統廃合が市から提示されるという、山舟生の歴史上、変革の年となった。自治振興会の発足という「希望」と小学校廃止という「危機」に一度に直面した。一方、2 年にわたる調査活動を通して、山舟生の「宝」にも出会い、人々の「まとまり」の力を体感することができた。自治振興会内では廃校となる小学校の利活用に考える動きも出ている。福援ゼミとしても、この危機を「好機」ととらえて、地域の「宝」を結集した学習・体験・交流・産業創出の機能を備えた拠点づくりをめざすべきであり、それはすなわち、阿武隈の里山の環境と生活・生業文化を含む「里山生活博物館」(Satoyama Living Museum) になるはずと考える (右表, 下図)。

「里山生活博物館」の構成分野案

歴史	地域史 小学校	民俗文化	山車祭り 羽山太鼓 獅子舞 万歳
信仰	神社 お堂		
工芸	和紙 お手玉	環境	地質・地形 羽山 動植物
農産加工	漬物 そば もち あんぼ柿	花	アジサイ エゴノキ ひまわり ハナモモ 福寿草 さくら
直売所	農産品 工芸品 ジビエ肉 ピザ		体験農園, 貸し農園



博物館づくりを通して、自分たちが地域の「宝」を再確認し、次いで統合先の梁川小学校の子供たちを呼びこんで梁川地区から伊達市全体の郷土学習、生活、文化、産業学習の拠点にする。さらには、福島県の北端という境界の位置を逆手にとって宮城県側とも連携し、そして「阿武隈山地」全体の里山文化の拠点という視野を持つ。担い手の高齢化への不安は、平均年齢 70・80 歳という「おやき」の小川庄 (長野) や「葉っぱビジネス」の上勝町 (徳島) などの成功事例に学ぶ。さらにその先には、日本の里山, アジアの里山, 世界の里山という連携も見通す。

施設の整備には自治体レベルでの予算配分を受けなければならず、市内 21 校を 11 校に半減させるという歴史的決定をした伊達市の状況から、遊休校舎間の調整・連携も必要になると思われる。様々な可能性に対処できるように、まず地域でしっかりした構想を持つことが必要と考える。

「地元学」の精神

1年目の報告書でも述べたように、山舟生には様々な「里山」ならではの資源があり、それはいわゆる里山がもたらす「生態系サービス」でもある。そして山舟生には、その資源についての専門知識と活用アイデアを持っている人々が既にいる。さらにまた、1980年代の「村づくり推進協議会」の時代から盛んな地域づくりを展開してきた歴史もある。しかしその担い手の方々は年々高齢化していく。

「生活博物館」づくりのためにまず必要なことは、なにもしなければ記憶のかなたに埋もれて失われてしまう彼らの知識や技能、山舟生の地域づくりに果たしてきた役割を記録にとどめることであり、それによってそれらを次世代に継承し、他地域にも誇れる地域の「歴史文化遺産」とすることである。それは1990年代後半から各地で広がりつつある「**地元学**」の取り組みである。「地元学」の学びを通して、地域に蓄積されてきた知識、技能、歴史の「宝」を掘り起こす。それはそのまま「生活博物館」のための資産となる。そしてその資産を自治振興会のもとに集めて、地域づくりに向けた力とする。

山舟生の人々の「まとまり力」をもってすれば、その実現は難しくないと考える。